

Updated Topics and Report (26th issue)



平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

東広島医療センターの呼吸器グループは、広島中央医療圏において診療に携わっておられる先生方へ定期的に“*Updated Topics and Report*”をお届けしております。

当グループは地域医療機関の先生方から多くの患者さんをご紹介頂き診療実績を積み上げてまいりました。グループ全体として、先生方や地域住民に信頼していただける医療を今後も提供できるよう診療レベルの向上に努めていくとともに、情報発信も行っていきたいと考えております。ご多忙中のところと存じますが、本誌を診療の合間などにお読みいただければ幸いです。

本号は、『地域連携周術期リハビリ研究会を開催』および『日本呼吸器学会地方会における優秀演題賞を受賞』のご報告、ならびに『肋骨骨髓炎に対して胸壁切除と皮膚科と協同で腹直筋皮弁による再建術を行った1例』の症例報告です。

2025年10月

➤ 地域連携周術期リハビリ 研究会を開催

呼吸器外科手術での入院前と退院後に地域連携で行う包括的周術期リハビリテーション (Comprehensive Perioperative Rehabilitation Protocol in Higashihiroshima: コペリハ東広島) に関する研究会・講演会を開催しました。『手術という機会を最大限に利用して、むしろ

第3回 地域医療連携で担う術前・術後の 呼吸リハビリテーション

日時 2025年8月29日（金）19:00～20:00

場所 NHO東広島医療センター 研修センター
【ハイブリッド】

健康体へ』をモットーに多施設の多職種が関与する、地域全体として各病院の特性を有効に活用した取り組みで、今回は木阪病院と安田病院のリハビリテーション科から、それぞれの病院での取り組みについて発表がありました。本取り組みは全国的にも関心が高まっており、会場内外で計81名の方が視聴されました。更に国立病院機構内でも最大規模であるNHO長崎医療センターから本取り組みに関して『地域連携の会での講演』依頼も届きました。

みは全国的にも関心が高まっており、会場内外で計81名の方が視聴されました。更に国立病院機構内でも最大規模であるNHO長崎医療センターから本取り組みに関して『地域連携の会での講演』依頼も届きました。

➤ 日本呼吸器学会中国・四国地方会で初期研修医セッション優秀演題賞を受賞

4月から初期研修医として医師キャリアをスタートさせたばかりの城野嘉月医師が発表した『空洞性結節影を呈した肺スエヒロタケ症 (Schizophyllum commune)の1切除例』が、第72回日本呼吸器学会の地方会において優秀演題賞を受賞しました。

肺真菌症の原因菌としてはアスペルギルス、クリプトコッカス等が一般的ですが、極めてまれな肺スエヒロタケ症が、専門機関での遺伝子配列解析を行い判明した症例報告でした。



➤ 肋骨骨髓炎に対して胸壁切除と皮膚科と協同で腹直筋皮弁による再建術を行った1例

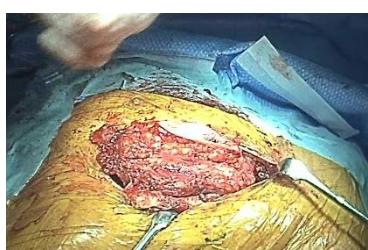
(症例) 83歳男性。右前胸部に痛みと発赤を伴う皮下腫瘍を認め、局所麻酔下に切開排膿を行い大腸菌が検出された。



(画像所見など) CT・MRI画像で右第6肋骨前方を主座とした骨髓炎から周囲組織への炎症波及が認められた(右図)。



(呼吸器グループカンファレンス) 抗生剤投与を行うも切開創からの排膿は持続し、外科的に骨髓炎を生じた肋骨の切除を行う方針となった。炎症は第6肋骨を中心とし上下合わせて3本の肋骨の範囲で広がっており(左図)、切除範囲が広くなるため、胸壁の再建が必要と判断された。感染性疾患であり再建には生体組織を用いるべきで、体位変換を行うことなく採取および再建が可能な腹直筋皮弁を作成することとし、皮膚科と協同での手術を行う方針とした。



(手術所見) 表皮開口部を含めた皮膚切除に加え、感染部位からマージンを約3cm確保しつつ大胸筋および第5～7肋骨を含めた胸壁全層を切除した(左上図・右上図)。切除範囲の内側は胸骨近くに至り、右内胸動脈を切離したため、筋皮弁は右内胸動脈に栄養されている右の腹直筋ではなく、左の腹直筋皮弁を作成した(右上・右下図)。左腹直筋皮弁は皮下トンネルを通して胸壁欠損部に誘導し、充填した(左図)。



(病理組織学的所見) 右第6肋骨の骨髓腔から皮下脂肪組織、表皮開口部にかけて連続して膿瘍を形成しており、右第6肋骨の骨髓炎および皮下膿瘍と診断した。



(術後経過) 胸腔内に異常はきたさなかった。筋皮弁は一部血流不全でデブリードマンを要したが、局所閉鎖

療法(VAC療法)を実施し治癒を促した。

(考察) 肋骨骨髓炎は外傷性と血行性に分けられ、後者では免疫抑制下や糖尿病の合併症例、カテーテル感染後や消化管感染後の報告が多い。本症例は外傷の既往なく、膿の培養にて大腸菌が検出されたこと、手術12週前に尿路感染の既往があったことから、尿路感染から血行性に肋骨骨髓炎を生じたと考えられる。抗菌薬不応例では外科的切除の適応となるが、感染性疾患であり切除部位の再建には生体組織が用いられるが、広背筋皮弁や大胸筋皮弁を作成した報告が多い。本症例は仰臥位下での大胸筋を含む前胸壁の切除であり、体位変換を行うことなく採取および再建が可能な腹直筋皮弁を選択し、**皮膚科との協同**で対応となった。

東広島医療センター呼吸器グループは、最高レベルの医療を提供できるよう、充実したスタッフによる最良の診療を心掛けてまいります。また**原則としてご紹介いただいた患者さんは、ご紹介元の先生に逆紹介するよう心がけております**。東広島医療センター呼吸器グループに対するご意見・ご不満・ご質問・ご感想、またお知りになりたい情報等ございましたら担当医もしくは地域連携室までご連絡ください (地域連携室 FAX: 082-493-6488)。